

ミニ巡検レポート ～品川界隈の水を巡る～

鳥取県立鳥取西高等学校 中村 秀司

地形の凸凹や、人間が地形を利用した痕跡を歩くテレビ番組や本が人気だ。こうしたガイドは、地理教育のコンテンツが豊富で、個人的に簡単な巡検をするのに大変役立つ。たまたま東京で半日ほど時間をつくることができたため、ミニ巡検を実施したところ、原稿依頼を頂戴することとなった。事前の準備は少なく、個人的に楽しんだ程度のものであり、レポートの内容は、巡検よりは浅いものであり、散策よりはほんの少し深いだけかもしれない。そんなお手軽な巡検レポートというものである点について、ご承知ください。

巡検を行ったのは、平成28年10月22日。この前日に、地元の鳥取県でマグニチュード6.6（平成28年10月25日時点）の地震があった。すぐに帰鳥する選択もあったが、予定どおり実施することにした。気象予報士の高校時代の友人とともに、宿泊先である天王洲を始点にして巡検に出かけた。事前準備は、ウェブページで品川宿の様子を調べたこと、東京の地形や水系に関する本を読んだ程度。簡単なフィールドワークの様子を紹介できればと思う。

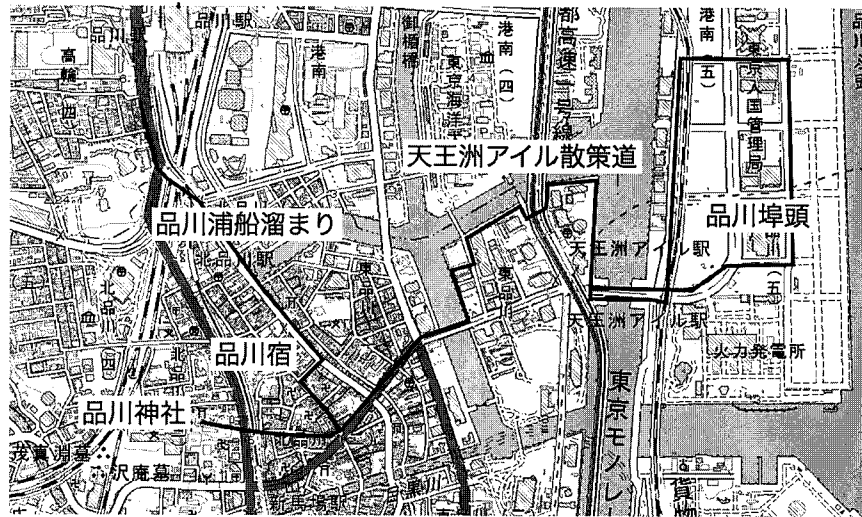
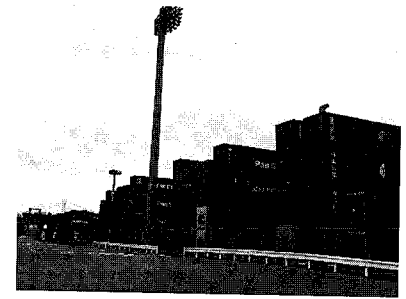


図1 巡検ルート前半（品川埠頭から品川駅まで）（国土地理院地理院地図により作成）

1 世界とつながる東京湾の水

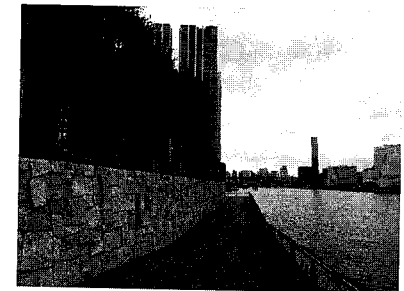
まずは、品川埠頭を歩く。土曜日の朝とあって歩行者や通行車両は少ない。品川橋で京浜運河を越え、埠頭に踏み入れる。コンテナを積んだトラックが道路脇に縦列に並び、ドライバーたちがコンテナを下ろす時間を静かに待っている。品川埠頭は、1967年に供用が開始された日本初のコンテナ埠頭である。埠頭には、物資を搭載したコンテナが整然と立ち並んでいる。警備員に聞くと、この後コンテナ船が到着し、積み下ろしを行うということ。大型のクレーンが備わっている。南側には都市ガスで発電する品川火力発電所。最初に出会った水は、東京の港湾機能の一つ、輸出入を行う世界とつながる東京湾の水。



品川埠頭

2 コミュニティをつくる運河の水

天王洲は、運河に囲まれた小さな街だ。景観や街路を大切に作る東京都の「しゃれた街並みづくり推進条例」によって、シーフォートコミュニティなどの地元団体が、天王洲アイル散策道を整備している。穏やかな運河沿いのボードウォークは、気持ちよく、散歩やジョギングを楽しむ人々が多い。ふれあい橋の周りは、住民による花火大会が開かれるなど、憩いの場となっている。2つ目の水は、街のコミュニティをつくる運河の水。



天王洲アイル散策

3 品川村の砂浜海岸の水

品川宿の鳥居前参道を通って交差点を渡り、洪積台地の縁にあたる急崖の上に、神社はある。さらに崖の上には富士山に模した小山があり、富士塚に登ることができる。小山は、俗に「アワ」とよばれる気泡の入った溶岩礫をコンクリートで固めたものように見える。富士山を参拝できない人のため、富士浅間神社が造営されている。品川宿を山頂から見下ろすと、その先に広がっていたであろう江戸湾の海岸や砂州が目に見えよう。この日は、七五三やお宮参りの参拝客が多く、子どもたちの晴れ着姿が見られる。神社の境外になるが、裏手には、佐藤栄作揮毫「板垣死すとも、自由は死せず」碑とともに、板垣退助の墓がある。

品川宿の本陣跡は聖蹟公園として整備されている。旧東海道を歩くと、宿場町の面影を残す街並みが保存され、古い履物屋や鰻屋が軒を連ねている。品川宿は東海道第一宿である。まちづくり協議会が歴史的景観を生かした再生に取り組んだ街並みは、往時の様子を偲ばせる。道路を歩くと感じる微妙な高低差は、海岸縁に堆積していたであろう砂地を連想させる。ここは、かつて品川ネギの産地だった。後日、目黒川の南側の宿場町を訪れると、陸地と海の見事な境界を発見。海岸方向に下る路地群や、高潮の際は岸壁だったであろう石垣といった痕跡を観察することができた。

海岸方向に一路寄ると、屋形船や釣り船が逗留する品川浦の船溜まりの湊。3軒

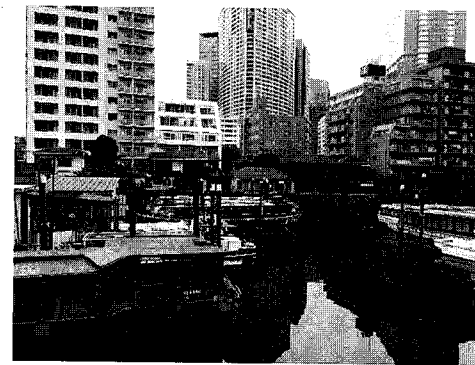


品川神社から品川宿を見下ろす

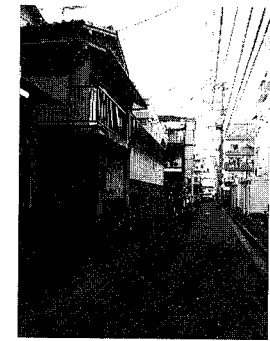


履物屋の軒先

の船宿が屋形船を営業している。近くには、古い看板を掲げた天ぷら屋。ここで、穴子やメゴチの天井を昼食にする。利田神社内には鯨塚。江戸時代には、16メートルの鯨が湾内に迷い込み、地元の漁師が捕獲して、江戸中の騒ぎになったようだ。この鯨は、この地に手厚く葬られている。3つ目の水は、品川村の半農半漁を支えた江戸湾の水。



品川浦の船溜まり



かつての岸壁の名残

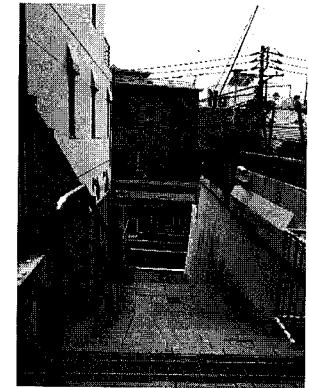


利田神社の鯨塚

4 台地上の村を支えた三田用水

「品川駅は港区にあり、目黒駅は品川区にあるって変だよな」などと話しながら、JR架線橋や京浜急行線路を渡り、品川駅の西側を北進すると突然現れる急崖。この崖は、かなり人工的な崖である。品川沖の御台場を造営するために削られたハツ山の土取場だ。急階段を登り、品川プリンスホテルの脇にある住宅地が、崖の端に位置する。

ハツ山から高輪台に入り、住宅地を歩く。JR線や品川駅の喧騒が全く聞こえないことに二人で驚く。音が何かに吸収されている。音は地形図に



は、表現できない。住宅地から、急階段で崖を降りれば、台地に刻まれた谷が出現する。谷を上流方向に登ると、都営浅草線高輪台駅のある交差点にたどり着く。三田用水は、玉川上水から下北沢で分流し、高輪台まで引かれた水道である。高輪台駅近くの交差点の一角に白洋舎の看板があり、その傍に路地がある。ここが三田用水の終わりに位置する。白金台二丁目から三丁目の路地を歩く。路地は狭く、少しカーブしている。「元禄」と刻まれた古い今里地藏の祠から少し進むと、水路跡の築堤が保存されている。用水は元々生活目的の上水なので、なるべく台地上、それも尾根を走っている。築堤は思ったよりも高さがあり、小さな古代ローマ水道を思い浮かべる。もちろんデザインは全く違うが、大切に水を運ぶ長城のようだ。



八ツ山の土取場跡に
造営された住宅地

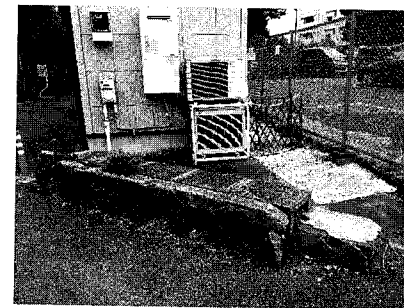


三田用水の水路跡



用水ルートを示す白タイル

地元管理組合が水路の断面を保存し、白タイルによって当時のルートを示してくれている(資料1)。右の写真は、三田用水に架かっていた橋の跡。4つ目の水は、江戸の街の繁栄を支えた水道の水。



三田用水の橋の跡

資料1 三田用水の説明文

三田上水は、江戸時代の拡大で増加した水の需要に応じるため、寛文四年(1664)に玉川上水の水を下北沢で分水したものです。

中村八郎右衛門・磯野助六によって開かれたといわれ、代田、代々木、渋谷、目黒を経て現在の白金台、高輪、三田、芝地区に配水されました。享保七年(1772)に学者室鳩巢の意見で本所(亀有)、青山、千川の各上水とともに廃止され、江戸の街を潤す水道は玉川、神田の両上水だけとなりました。しかし、三田上水は流域の村々の農業用水でもあったので、嘆願して廃止の翌々年から再び水を引くことを許され、三田用水と呼ばれて一宿十三カ村の用水として使用されました。

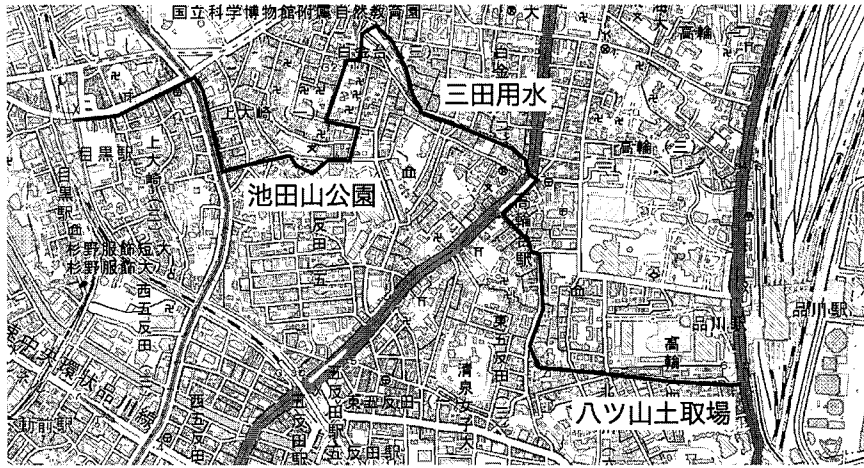
当時の水道は自然に流れるだけでしたので、この付近では堤上に水路を残して通す工夫をしました。ほとんど失われてしまった三田用水路の貴重な遺構は、特に断面がわかるように残されています。また、水路の通っていた位置を示すための色違いのタイルを地上に並べて記念としています。

昭和五十七年三月設置(平成十九年二月立替)

港区教育委員会 管理 ハイクレスト白金台管理組合

5 池田家下屋敷の庭園の水

白金台から寺社の密集地を抜け、第三日野小学校の谷を登り、池田山公園に到着する。池田山公園は、旧備前藩池田家下屋敷の庭園が保存されたものであり、谷に面する洪積台地の急崖を利用した池泉回遊式庭園がある。周りはコンクリートやアスファルトに覆われているが、台地の地形を生かした造形を見ることができる。最後の水は、地形を活かして構築された庭園の水。



巡検ルート後半（品川駅から目黒駅まで）（国土地理院地理院地図により作成）

目黒駅は、高台の上に作られている。周りの五反田や渋谷の駅が坂の下に位置しているのに対し、目黒駅に向かうときは、坂を登ることになる。目黒駅から五反田駅までの車窓から見る傾斜の景色は、これまで見たものと違っている。

海岸部から洪積台地、台地の谷間と目まぐるしく変わる地形と景観。東京の街を支えるさまざまな水。谷間の喧騒と台地上の閑静とのコントラスト。ガイド本では分からない五感で学ぶ巡検となった。

少しだけ時間があれば、簡単な巡検ができるという事例を紹介した。地域の成り立ちを学ぶためには、実際に歩いてみるのが一番である。宿場町の歴史見学で出会った皆様は、退職なさった年代の方々が中心のようだ。学校業務で忙しいところだが、是非、現役の若い先生方にたくさん歩いていただきたいと思う。

参考文献

- 皆川典久+東京スリバチ学会『東京スリバチ地形入門』2016年、
イースト・プレス。
- 竹内正浩『水系と3Dイラストでたどる東京地形散歩』2016年、宝島社。
- 貝塚爽平『東京の自然史』2011年、講談社。